

書評

『セントエルモの光』、『アンドロメダの涙』

著者 天川 栄人

飯塚礼子（明星大学、日食情報センター）



天川栄人 著

講談社／224 ページ、224 ページ

本体 1,650 円＋税／2023 年 4 月発行

本体 1,600 円＋税／2023 年 9 月発行

2冊の書籍は、「ガクコー天文シリーズ」の春夏編と秋冬編にわかれて星座についての記載がなされている。中高生には現在の学校生活と重なる心情の揺れなど共感部分があるかもしれない。ヤングアダルトには、学生生活を思い出させる部分があるだろう。中高年には、一部共感する部分と時代の流れを感じる部分が混在する作品だと考える。

1作目が「セントエルモの光」の春夏編である。物語の前半は主人公の女子高校生1年の「えるも」を通して令和時代の中高生の友人との距離感や学校生活について一部を知ることができた。昭和生まれには、時代の違いを知ることができる。生き辛さの中から、天文部員1人になってしまった天文オタクの部長と顧問の先生との出会いから、自ら天体観望会を開催することを提案しそれに向けて、他の人との接し方を学んで行くようである。

天文関連、多くは季節の星座であるが、作者は元、天文部に所属していたことから、体験に基づいて記載をしているようである。2作目が「アンドロメダの涙」で秋冬編となる。秋と言っても9月～10月はまだ、夏の星座が日没後に見える。よって、作品の中では夜中に観測をおこなっているところに工夫がみられる。ここでは、将来なりたいたいものが見つからない主人公と将来が決められている友人たちとの心情が描かれ進学をどのように捉えたらよいか、天空を見つめることで何かを見いだそうとしている。天文部としては、文化祭に向けて、プラネタリウム作成に向って様々な困難を解決していく。本を読まれた天文好きの方々にとって、登場人物たちの行動に過去の自分を重ね、同様の体験をされた方も多いのではないだろうか。作者も実際に「えるも」たちが作るプラネタリウムを自ら作成したとのことである。

全体を通し、作品の展開が気になり、中断することなく一気に読んでしまった。少々気になるのは、作品の中に描かれている天体望遠鏡でそこまで解るかと言う私の素朴な疑問は残るが、口径数の記載がないのでそこは想像の範囲で良いのかもしれない。

天文に興味を抱いていない中高生には是非お勧めしたい作品である。



飯塚 礼子